多文化共生社会実現に向けた
道徳授業海外協働実践研究
―フィリピンでの実践を通して―

松田　憲子[1]
土田　雄一[2]
篠原　千恵[3]
樋口　陽樹[4]

要　旨

本研究では、道徳科において多文化共生する力を育むための教材および指導方法を開発し、フィリピンでの実践を通してその効果を分析した。韓国の道徳教科書に知見を得て開発した教材「Paul の悩み」は、「①問題の解決の仕方を学ぶ」「②心情を考えて問題解決する」「③自分ならどうするか実践的に考える」三段階の学習段階で構成している。これをフィリピンで実践し、授業記録、ワークシート記述、フィリピンの教員からの評価、授業者の振り返りから分析した結果、ねらい（「相互理解」）を達成することができ、効果的な指導法であることがわかった。今後、さらに協働実践の継続や新たな教材開発が課題である。

[1] 神田外語大学外国語学部英米語学科特任准教授。
[2] 敬愛大学教育学部教授。
[3] 浦安市立堀江中学校教諭。
[4] 一宮町立東浪見小学校教諭。

Ⅰ　問題の所在と目的

１．問題の所在と目的

今後子どもたちが生きていく社会は、様々な国や異なる文化の人々と共に生きる多文化共生社会となることが予測される。令和 3 年度「学校基本調査」（文部科学省）によると公立学校に在籍している外国籍の児童生徒数は、114,853 人と増え続けており、「学校の国際化」は着実に進展している。

多文化共生教育実践の視点として、佐藤（2019）は「外国に対する正確な知識を提供し、科学的な認識力を高めていくこと」「人と関わる力の育成、子どもたちに多様な見方や考え方を育てること」等を挙げ、松尾（2017）は「お互いの違いを認め合いながら、共通のルールを見出す努力が必要である」と指摘している。つまり、共生する力を育てるには、異文化を理解するとともに互いの立場や個性を尊重し合う「相互理解・寛容」、互いに信頼し合う「友情、信頼」、個性を大事にしようとする「個性の伸長」などについて学ぶことが必要である。

現行の学習指導要領（2017）には、小学校低学年に「他国の人々や文化に親しむこと」という内容が加わった。しかし、多文化共生社会に向けた力をつけるには「親しむ」だけでなく、異なる文化への関心や、それを受け入れる寛容さや思いやりの心情を育み、相手を受け入れる、違いを認める、互いを尊重し合う等の基盤を育む教材が必要である。さらに、上薗（2014）が「道徳授業が、1 つの文化圏に根ざせばいい時代は過ぎている」と指摘するように、海外と双方向で検討することで、その力をより育むものとなる。

一方、「令和 3 年度道徳教育実施状況調査」（文部科学省）によると道徳科の指導方法について「話合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導」（63.8%）「物事を多面的・多角的に考えるための指導」（55.8%）等、多く教員が課題として挙げるなど、指導方法の検討は急務である。

そこで、筆者らは多文化共生社会実現に向け「共生」する力を育むために、道徳教材とその適切な指導方法を国内外の道徳教育から知見を得て開発し、取り組

むべき視点を得ることを目的に研究を進めてきた。本研究はその 3 年目として、韓国の道徳教科書に知見を得て開発した教材・指導法を用いた国内での実践（2022）をもとにフィリピンで実践し、その有効性を検証することを目的としたものである。

２．研究の経緯

(1) 現行の教科書教材の分析[5]

小学校検定教科書（2019 年度）全 1721 教材について、海外に関連する素材が含まれている教材を分析した結果、文化理解や国同士の友好など内容は多岐にわたるものの、人物同士が関わるなど交流の程度が高い教材は 4.7%しかなかった。また主たる内容項目は「国際親善、国際理解」、「希望と勇気、努力と強い意志」が多く、「共生」する力の育成にむけて「公正、公平、社会正義」「相互理解、寛容」「個性の伸長」「友情、信頼」等をねらいとした教材や、「多文化共生社会の形成」と結びつく指導方法が必要であることがわかった。

(2) 韓国道徳教科書を基にした教材開発と国内実践[6]

多文化共生社会が進展し、日本と同様に道徳の授業が行われている韓国の道徳から知見を得て、2 時間扱いの単元を開発した。授業構成は、韓国の授業段階をもとに、まず問題の解決の仕方を学ぶ、それを基に心情を考えて問題の解決を図る、さらに自分ならどうするか実践的に考えるという三段階で構成した。

ねらいを第 1 時は「国際理解」、第 2 時は「相互理解・寛容」として、友達との違いを乗り越えることを通して多文化共生する力を育もうとした授業である。第 2 時には、すごろくを活用して、様々な場面の問題について自分事として考えさせた。韓国の道徳教科書を基に開発した道徳教材と指導方法は、「どう行動するのか」と自分事として考えさせることに有効だった。

---

[5] 松田・土田(2021)「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅠ―教科書教材の分析」『千葉大学教育実践研究』第 24 号

[6] 松田・土田(2022)「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅡ―韓国道徳教科書を基にした教材開発と実践―」『千葉大学教育実践研究究』第 25 号

Ⅱ　研究の方法

１．フィリピンでの実践

国内実践をもとにフィリピンで実践を行う。フィリピンもまた、韓国同様多文化共生社会が進展している。日本で作成した教材をフィリピンで実践し、日本とフィリピンの双方向から検討する。実践は、韓国道徳を基にした新規教材「Paul の悩み」と「四本の木」である。「四本の木」は土田（2018、2019）が実践を行っているが、今回は現地のバリュー教育を担当する教員と協働で実践した。なお、本稿では「Paul の悩み」について取り上げ、「四本の木」は別に報告する。

２．教材の開発

葛藤場面について考える教材を、国内実践で有効だった三段階の構成を生かして作成した。

学習段階①	問題の解決の仕方を学ぶ
学習段階②	心情を考えて問題解決する
学習段階③	自分ならどうするか実践的に考える

内容は、韓国道徳教科書 5 年「葛藤を解決する知恵」を基に、「相互理解、寛容」をねらいとして開発した。開発にあたっての留意点は次の点である。

・場面設定をフィリピンにし、身近な問題として考えられるようにする。
・「相互理解、寛容」を主なねらいとし、葛藤場面を乗り越えるためにはどうしたらよいかを考えさせる。
・学習段階①②で学んだことを、学習段階③の自分事として考える場面では、より多くの葛藤の内容について考えさせる。
・「すごろく」を「カード」に変更し、短時間でより多くのカードに取り組むことができるとともに、子どもたちがやり方を理解しやすくする。

上記の点に留意し、教材「Paul の悩み」を作成した。教材のあらすじは次の通りである。

【学習段階①問題の解決の仕方を学ぶ】フィリピンの Paul の隣に韓国人の家族が引っ越してきた。しばらくして隣人から「もう少し静かにしてほしい」と言われ、うるさいと思っていなかった Paul は驚く。韓国の道徳教科書に同じような音の問題を手紙で気持ちを伝え合い、解決したことを学ぶ。

【学習段階②心情を考えて問題解決する】Paul は友達と予定が合い、久しぶりにバスケットボールの試合の約束をした。しかし帰宅後、母親に小さい弟たちと留守番を頼まれた。小さい弟たちは試合には連れていけない。Paul は困ってしまう。

【学習段階③自分ならどうするか実践的に考える】様々な課題や葛藤場面が書かれたカードの問いに答える。

学習段階③のカードの概要は表１の通りである。

表１　学習段階③　カードの内容

①	あひると豚の皮を出したら、日本人が驚いて食べようとしない。
②	「自分とちがう意見はまちがいだ」と思っている友だちに伝えたいこと。
③	韓国の友達の家で、ゆでたたこ料理を出された。
④	外国から転入生が来た。
⑤	アメリカから来た友達が、手で食事をするおばあちゃんを見て驚いた。
⑥	学級委員に女子または男子しか出られないと言われた。
⑦	隣の席の左利きの友達が字を書くときによくぶつかる。
⑧	周りに人がいないときに外国人から知らない言葉で話しかけられた。
⑨	友達との約束の時間に 15 分ほど遅れそうだ。
⑩	夜、隣の家から大きな音楽が流れ、大好きなドラマの音が聞こえない。
⑪	他の島から来た転入生が自分の言葉が違うことを気にしている。
⑫	バスで外国人の隣の席しか空いていない。
⑬	みんなで食事しているときに、最後の一つを日本から来た子が食べてしまった。
⑭	転校生のうちに遊びに行ったら、バッタの料理を勧められた。
⑮	日本から来た転校生にセブのいいところを教えてと言われた。
⑯	ある国に行ったら、フィリピンから来たという理由で無視された。

３．実践の方法

(1) 対象　サンカルロス大学附属初等中等学校 A キャンパス校

Grade6　27 名、Grade7-1　31 名、7-2　32 名、計 3 クラス　90 名

(2) 期日　2023 年 2 月 22 日、23 日　授業時間　約 40 分

(3) 実践授業　篠原（T1）・樋口（T2）の TT による実践。アクションリサーチを用いて行う。使用言語は英語。

４．実践の分析方法

実践については、①授業のビデオ分析、②児童生徒のワークシート分析、③現地教員の評価、④授業者の実践の振り返りの 4 点から分析した。

Ⅲ　研究の実際

１．実践授業の概要

3 クラスとも初対面の飛び込み授業であった。教材はスライドと口頭で、発問は口頭とカードで示し、視覚的にわかりやすくした。発問の趣旨が明確に伝わるように改善するなど、アクションリサーチを重ねながら実践した。

「問題を解決するには何が一番大切か」とテーマを示して授業を開始した。学習段階①では、「『静かにしてほしい』と言われた Paul の気持ちを考えた後、韓国の教科書から学んだ解決のモデルを生かして、再度 Paul の問題を考えた。

学習段階②では、教材をもとに「Paul はどうしたらいいか」を中心に考えた。多くの生徒の「弟の世話をするべき」という意見に、「友達はそれでいいの？約束は？」と T1 が問い返し、アドバイスをワークシートに書かせた。発表場面では T2 が Paul 役になって、役割演技を取り入れてアドバイスを聞いた。生徒は実際に友達にアドバイスするかのように発表することができ、より自分事として考えることにつながった。話し合いでも弟を世話するという意見が多く、それらの意見を認めつつ、T1 は「友達はどうなるの？」と問い返して深めた。

学習段階③では、グループで16 枚のカード（表 1）の問題について考えた後、

全体で印象に残ったカードを発表し合った。最後に問題を解決するに大切なことをまとめ、学びを振り返って授業を終えた。

２．実践の分析

3 クラスの実践から、最後の実践クラスの Grade7-2 について取り上げる。

(1) 授業ビデオの分析

学習段階①で「『静かにしてほしい』と言われた Paul はどのように感じたか」という発問に対しては「悲しい」「イライラする」「(Paul が) 謝るといい」など、Paul の気持ちを考えることができた。韓国の道徳教科書から解決方法を学び、再度 Paul はどうしたらよいか訊くと「静かにする」という行動から「気持ちを共有する」「隣人と話す」など、気持ちを共有することについても考えが広がった。問題の解決のモデルを学ぶことで、トラブルについてその場の行動だけでなく、「気持ちを伝え合う」解決の仕方を学ぶことができたことがわかる。

学習段階②の悩んでいる Paul へのアドバイスの場面では、生徒たちからは家族を優先するのが当然という反応であった。「弟たちの世話をする」「家族が第一。小さい弟たちの世話をして、そのあとバスケに行く」という意見に、T1 が「友達はどうしますか？」と問い返すと「後でバスケに行くように友達に言う」「友達に伝える」等の「伝える」という意見が出た。T1 が「問題解決には、お互いのことを考えることが大切だったね」と確認した。

この段階では Paul や周囲の心情を考えつつ葛藤を解決することを目指したが、生徒の反応は迷わず「家族が第一」と葛藤にならなかった。教材作成にあたって、フィリピンの家族を大切にする文化についての理解が不足していた。しかし、T1 の「約束」「友人をどうするか」という問い返しによって、授業のねらいである課題の解決の仕方について考えを深めることができた。

学習段階③は、この段階は多文化共生に関わる葛藤場面で自分ならどうするか実践的に考えさせた。「友達との約束に遅れそうだがどうする？」に「謝る」「説明すればわかってもらえる」「遅れているのが分からなかったと言う」のような

相手を考慮した回答から、学習段階①での学びが窺えた。

(2) ワークシートの記述分析

Ⅱ3で述べたように授業時間が40分と短く、ワークシートに記入した人数が設問によって異なる。設問ごとの回答者数は各グラフで示す。

① Paul へのアドバイス

学習段階②の中心発問「Paul はどうしたらよいかアドバイスしましょう」へのワークシートの記述内容を分析した。

まず Paul へのアドバイスの「内容」を分析し、カテゴリーごとに分類した（図 1）。記述には複数の内容を含んでいるものもある。各カテゴリーの文例は表 2 の通りである。文例は当該カテゴリーに関わる部分を引用した。

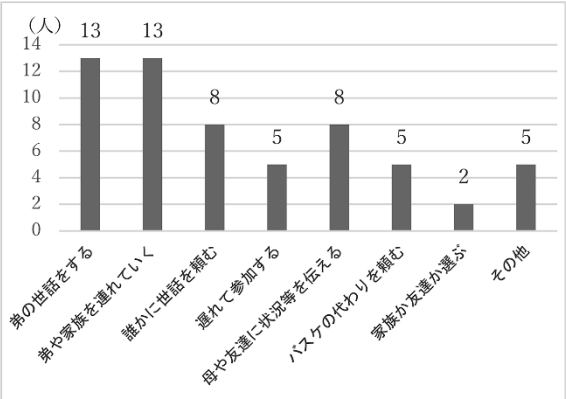

図１　Paul へのアドバイスの内容　カテゴリー分類
（32 人　複数回答）

表２　Paul へのアドバイスの内容　カテゴリーごとの文例

弟の世話をする	1 いつでもバスケをすることができる。そのため弟たちの世話をした方がいい。 2 家族は世界であなたのことを本当に気にかけている唯一の人なので、はるかに大切。だから、ポールは弟たちを世話するべき。
弟を連れていく	3 バスケに弟たちを連れて行って、一緒に見るべき。 4 家族を試合に連れてきて、試合を見せる。
誰かに世話を頼む	5 友達に弟たちの世話を頼む。 6 叔父さんに弟たちを見るように伝える。 7 近所の人に弟たちの世話を頼む。

遅れて参加する	8 彼は弟を世話してから後で遊ぶ。 9 最初に弟たちを世話してから、バスケに行く。
母や友達に状況や気持ちを伝える	10 お母さんにバスケに行きたいことを伝える。 11 弟たちがいるからバスケには行けないと友達に説明する。 12 お母さんにすでに予定があって忙しいと伝えるべき。もしくは、弟たちを世話して友達にはバスケをキャンセルするようにいう。
バスケの代わりを頼む	13 バスケは自分の代わりになる誰かにお願いすればいい。 14 友達に新しいメンバーを見つけるように伝える。
家族か友達か選ぶ	15 家族か、友達かを選ぶべき。次回友達と遊ぶか、友達に自分の代わりを見つけるように頼んで、自分なしで試合をしてもらう。
その他	16 可能であれば、試合の代わりに友達を（家に）呼ぶ。

「弟の世話をする」（13 人）のように「家族が優先」という意見が多かった（図 1）。中には「家族を第一に優先して考えるべき」という理由を挙げる生徒も複数いた。これは授業ビデオの分析の「家族を優先する」という発言とも重なる。まず家族を優先し、その後に友達との約束を果たす「遅れて参加する」（5 名）の意見もあった（図 1）。また「弟を連れていく」（13 人）のように家族と友達を両立させようとする案や、「母や友達に状況等を伝える」（8 名）、「バスケの代わりを頼む」（5 名）のように、状況を説明したり参加できないことへの対応を考えたりした内容もあった（図 1）。これらの内容から、「家族を優先する」しつつ「バスケに参加する」という友達との約束も果たそうとしている気持ちもあることがわかった。

そこで、記述内容をアドバイスの目的ごとに分類してみた（図 2）。アドバイスの目的を「家族を優先」「友達を優先」「両立」「状況を伝えて選択する」の 4 つに分類して分析した結果、「家族と友達を両立」（17 名）が最も多かった。各項目の文例は表 3 の通りである。

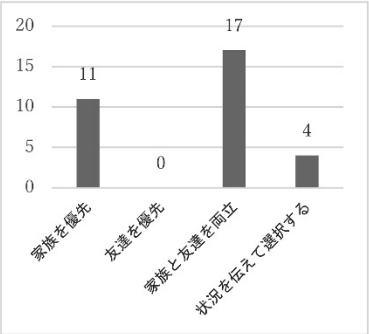

図２　Paul へのアドバイス
目的別分類（32 名）

表 3.1 のように「家族が優先」だから「家

族といる」「弟の世話をする」ことだけに言及した生徒は 2 名、他は「家族が優先」としつつ、「友達には代役を見つけてと伝える」（表 3.2）、「友達に説明するべき」「可能であれば弟を連れていく」等、友達に対しての行動も書かれていた。

表３　Paul へのアドバイス分類　文例

家族を優先	1	家族は大切なので友達を放っておいて、大切な弟たちといる。友達は永遠には続かないけど、家族は続く。だから、ポールは家族を選ぶべき。
	2	ポールは友達に弟たちを世話しなければいけないと伝える。友達には代役を見つけて、と伝える。
家族と友達を両立	3	最初に弟たちを世話してから、バスケに行く。
	4	彼はお母さん、弟たちと一緒に試合に行くべき
	5	ポールはほかの友達に弟たちを世話頼んで、バスケに参加する。
	6	他の友達や近所の人に弟を見てもらうように頼む。それか、家族を試合に連れていく。
	7	お母さんにバスケに行きたいことを伝えて弟たちを連れていく。
状況・気持ちを伝えて選択する	8	家族か、友達かを選ぶべき。次回友達と遊ぶか、友達に自分の代わりを見つけるように頼んで、自分なしで試合をしてもらう。
	9	バスケに行くべきかどうか家族と友達の両方に尋ねるべき。

「家族と友達を両立」では、最も多かった「弟たちと一緒に行く」（表 3.4）のほか、友達や近所の人等に「頼む」という意見もあった（表 3.6）。また、「お母さんに伝えて」（表 3.7）のように、自分の気持ちを伝えることを意識した内容もあった。「状況・気持ちを伝えて選択する」でも、「伝える」（表 3.8）、「家族と友達の両方に尋ねるべき」（表 3.9）という内容もあった。

これらの記述内容から「家族を優先」する思いの中にも、友達への配慮や両立するための対応についても考えていることがわかった。

② 印象に残ったカード

学習段階③のグループワークで取り組んだ16 枚のカード（表 1）から、印象に残ったカードを選んだ[7]（図 3）。

[7] 各グループでランダムにカードをめくって話し合ったため、グループによって話し合った枚数も内容も異なる。

多いものから順に、④「外国から転入生が来た」（7 人）、⑤「アメリカから来た友達が、手で食事をするおばあちゃんを見て驚いた」（4 人）③「韓国の友達の家で、ゆでたたこ料理を出された」（4 人）という結果だった。

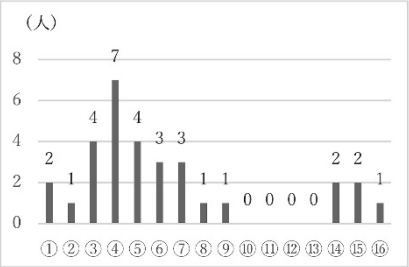

図３　印象に残ったカード（30 名）

これらのカードを、その内容から食文化や感覚などの「違い」「外国人との関わり」「差別・偏見」「自国の良さ」の 4 つのカテゴリーに、さらに「違い」を 8 カテゴリーに分類して、選択したカードの数を分析したものが図 4 である。

各グループで取り組んだカードの枚数や内容、カテゴリーごとのカードの枚数が異なるため比較は難しいが、「違い」を選んだ生徒が 19 人、「外国人との関わり」は 9 人、「差別・偏見」「自国の良さ」は各 1 人と、「違い」に関する内容を挙げた生徒が多かった（図 4）。

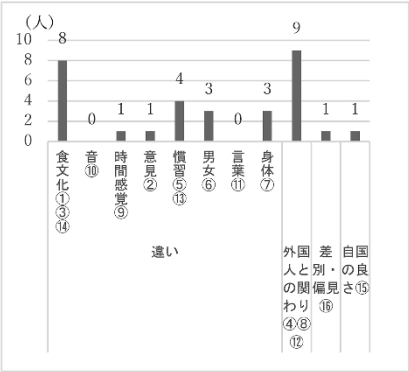

図４　印象に残ったカード
カテゴリー分類（30 名）

各カードの主な選択理由の文例は、表 4 の通りである。

理由には他国の文化への関心が窺える（表 4.1,9）。一方で「人は互いに違うことを知ることは大切」（表 4.4）「正直な気持ちを伝える」（表 4.9）のような相互理解を大切にする考えや、「外見や性別で他人を判断してはいけない」（表 4.6）という公正・公平な態度が窺える理由もあった。カードの問題をもとに、他国の文化についてその違いに関心を向けると共に、文化の違いのほか様々な違いになどに起因する葛藤場面では何が大切かを考えたことがわかる。

表４　印象に残ったカード理由　文例

違い	食文化	1	フィリピンではバッタを普段食べないので、印象的だった。⑭
	時間	2	自分自身でする選択を持っていたり、助けを求めることもある。常に助けたり、助けられたりすることはOK.　⑨
	意見	3	距離をおく。②
	慣習	4	人は互いに違うことを知ることは大切。⑤
	慣習	5	人々と社会は自分たちがそれが主流だと思うような意見や、人を傷つけるようなことをするべきではないから。⑤
	男女	6	外見や性別で他人を判断してはいけないということ。その人が賢くて心が良ければそれでいいです。⑥
	身体	7	左利きの人に共感できるし、おそらくそのアドバイスは使えそうだから。⑦
外国人との関わり		8	外国から来た転入生を思いやることが好きで、文化や言語などを教えて、友達になる。④
		9	相手にあなたの正直な気持ちを伝えること、相手があなたを理解できないことを伝えること。⑧
差別・偏見		（理由は未記入）	
自国の良さ		10	自分の国が好きだし、美しい場所を共有することも好きだから。⑮

カードを選んだ理由を、その内容をカテゴリーごとに分類したものが図５である。主に「国際理解」「相互理解」「共感」「思いやり」「友情」「公平・公正」「多文化共生」「自国の良さ」に分類された。

「違い　食文化」は「国際理解」、「違い　男女」は「公正・公平」、「違い、身体」は「共感」の理由が多い一方で、「外国人との関わり」の中の④「外国から転入生が来た」には「思いやり」「国際理解」「友情」「多文化共生」などさまざまな理由が見られた。前者のカードは場面が具体的であったことも起因していると考えられるが、転入生という設定が身近であったため、自分に置き換えやすかったと考えられる。

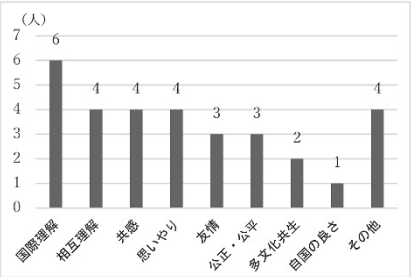

図５　印象に残ったカードの理由
カテゴリー分類（26名　複数回答）

各分類項目の文例は表 5 の通りである。文例については分類に関わる部分を中心に記載した。

表５　印象に残ったカードの理由カテゴリー分類　文例

国際理解	1	（転入生は）フィリピンの文化を知っていくから。
相互理解	2	自分自身が選択することも、助けを求めることもある。常に助けたり、助けられたりすることは OK.
共感	3	私とクラスメイトが同じことを考えていたから。
思いやり	4	誰も知らない、言語も分からないというプレッシャーで、学校を移ることは大変。その人が学校や言語のことを知ったり、歓迎されている気持ちになるようにベストを尽くしたい。
公正・公平	5	外見や性別で他人を判断してはいけないということ。
友情	6	新しい生徒と交流をして友達になれるから
多文化共生	7	誰も知らない、言語も分からないというプレッシャーで、学校を移ることは大変。その人が学校や言語のことを知ったり、歓迎されている気持ちになるようにベストを尽くしたい。
自国の良さ	8	自分の国が好きだし、美しい場所を共有することも好きだから。
その他	9	もし韓国の家にいたら、何をするかについて話したから。

③ 授業の振り返り

学習段階③を終えた後、今日の授業で学んだことを振り返った。T1 の「この授業について感じたことを書いてください」という問いかけに短時間で記述したものである。32 名中 30 名の記述があった。

記述内容によってカテゴリー分類したものが図 6 である。「問題の解決の仕方」「相互理解・気持ちの共有」「家族の大切さ」「友達の意見を聞く」「楽しい（授業の感想）」等のカテゴリーに分けられた。

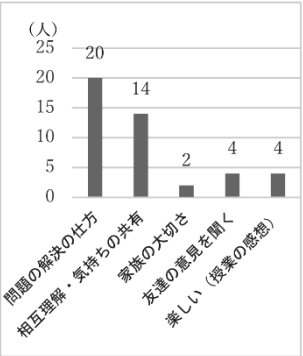

図６　授業の振り返り カテゴリー分類 （30 名　複数回答）

最も多かった「問題の解決の仕方」（20 人）には、解決する方法について「思

いやりをもつ」「状況を理解して助ける」「一緒に解決する」「多くの視点から考える」（表 6）など、解決の方法について具体的に書かれているものが多かった。同様に「相互理解・気持ちの共有」でも、交流の大切さとともに、「人と話す」「何を感じているのかを伝えて」のように「どのように理解し合うのか」や、「親しくなる」など「理解し合う良さ」についても言及している記述があった。

表６　授業の振り返りカテゴリー分類文例

問題の解決の仕方	1	問題を解決するうえで一番大切なことは、アドバイスをするために、思いやりを持って正しく考えること。他者の気持ちを理解し考えることがとても大切。
	2	お互いに認識し、理解しようとする。状況を理解して、助けて、他者にアドバイスをあげる、問題を一緒に解決する。
	3	問題を解決するときに今日の授業が役に立つと思う。一番大切なことは、問題を分析し、解決すること。
	4	問題解決のためにできる最も大切なことは、多くの視点から考えること。
相互理解・気持ちの共有	5	どんな状況にあっても、常に人を助けようとするべきだと学んだ。加えて、気持ちを共有して、人と話すことはお互いを理解するために大切である。
	6	常に何を感じているかを伝えて、人々とより交流する。
	7	お互い違っていても、常に同じように接する。なぜなら、私たちは私たちなりに完璧だから。
	8	クラスメイトの理解とお互いの気持ちを共有することで、以前よりも人々が親しくなることを学んだ。
家族の大切さ	9	今日の目標は、お互いを理解しようとすることだった。ポールの問題について話しあって、彼へのアドバイスを考えた。問題解決のためにできる最も大切なことは、神に祈って、誰かに助けを求めること。家族に助けを求めることもできる。
	10	ポールの問題には多くの解決法があるから、家族を大切にするべき。
友達の意見を聞く	11	今日の授業は楽しかった。なぜなら、互いに認識し、理解することについて学んだし、グループ活動で、クラスメイトとたくさん交流したから。
	12	日本はお気に入りの国だから楽しいと感じた。普段静かで発言をしない人の異なる意見を知ることが出来たので良かった。
楽しい（感想）	13	とてもよかったが笑ってしまった。チエのアクセントがよかった。

授業で話し合いの中心となった「家族が大切」について含んだ内容は 2 名だった（表 6.9,10）。学習段階②の話し合いは家族中心の議論だったが、生徒は学習全体を通して学んだことを振り返っていた。

また、「友達の意見を聞く」というカテゴリーに分類した内容は、友達の考えを聴いたことが印象に強く残っていた。これは聴き合い学習という指導方法が彼らにとっては新鮮だったからではないだろうか。「普段静かで発言をしない人の異なる意見を知ることが出来た」（表 6.12）からいつもの授業とは異なっていた様子も窺える。「問題解決のためにできる最も大切なことは、神に祈って、誰かに助けを求めること。家族に助けを求めることもできる」（表 6.9）のように、日ごろの学びと重ねて考えたであろう生徒もいた。

一方、学習段階②で Paul へのアドバイスで「家族」を優先していた生徒はどのように振り返ったのか。「弟の世話をした方がいい」とアドバイスしていた生徒は「考えていることを共有する」、それによって「以前より親しくなる」と学んでいる（表 6.1,2）また、「多くの解決法がある」ことをあげた生徒もいる（表 6.3）。いずれも、考えを共有することの良さやよりよい解決の在り方を学んだことがわかる。

④ アンケートと「学んだこと」

アンケートは 5 項目について 4 件法で行った。また、アンケートの最後には「今日の授業で学んだこと」を短い言葉で記入する欄を設けた。

アンケートの結果は図 7 の通りである。　「1 授業が面白かったか（This class was interesting.）」に対して、「とてもそう思う」（26 人）、「そう思う」（4 人）と、回答者全員が肯定的評価であった。「4 ほかの人の考えからいろいろな見方をすることができた」（「とてもそう思う」21 人、「そう思う」9 人）「2 友達の考えをよく聞くことができた」（「とてもそう思う」15 人「そう思う」14 人）の肯定的評価の高さは、授業の振り返りの記述（表 6.11,12）とも重なる。生徒が友達の意見を聞き、見方を広げる授業を高く評価したといえる。

アンケートの最後に「What I learned in this class was(　　)」と、「今日の授業で学んだこと」を短い言葉で記入させた。短時間での記入だったため、記入できた者は 20 人だった。その内容をカテゴリー別に分類したものが図 8、各カテゴリーの文例が表 7 である。短い言葉で記入することで、生徒は学んだことを焦点化していた。

「相互理解」と「問題解決」に集中した結果は、「授業の振り返り」（図 6）と重なる。「お互いの問題を理解する」「話す」「共有する」（表 7）のように、様々な考えを理解し合い、気持ちを共有する内容を含んだ「相互理解」のカテゴリーが最も多かった。次は「問題は解決できる」「アドバイスを求める」（表 7）など問題を解決する内容の「問題解決」のカテゴリーだった（図 8）。この問題解決には「自分の問題と他者の問題」（表 7.7）のように、自分だけの問題ではなく、他者の問題も取り上げるなど、視点を広く持っているものもあった。生徒は相互に理解し合ことの大切さや、それが問題の解決に結びつくことを学んでいた。

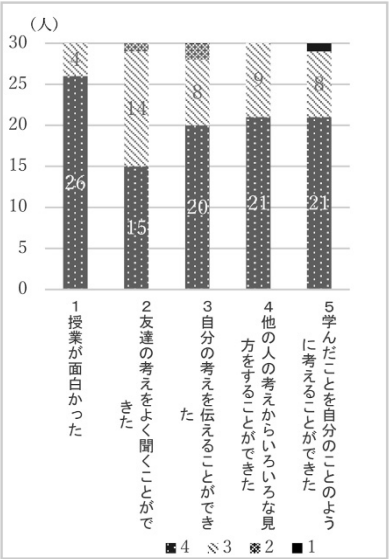

図７　授業アンケート（30 人）

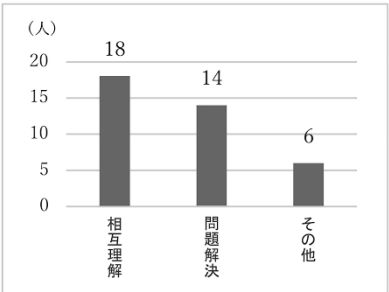

図８　授業から学んだこと
カテゴリー分類
（20 名　複数回答）

表７　授業から学んだことカテゴリー別文例

相互理解	1 お互いの問題を理解すること。 2 人と話すことは大切 3 異なる考えがたくさんある。 4 困ったときに、お互いの気持ちを共有すること。
問題解決	5 問題は解決策で解決できる。 6 必要な時にアドバイスを求めること。 7 自分の問題と他者の問題を解決する方法を常に見つけること。
その他	8 家族はいつも大切。問題解決方法をみつけた。 9 amazing

(3) 現地教員の評価

各実践日の授業終了後に、当該授業を参観したバリュー教育担当教員（3 名）と協議を行った。ここでは「Paul の悩み」に関わる評価について記述する。

教材の内容および学習活動について一定の評価を得られた。特に、教材の問題に「アドバイスする」という設定が自分事として考えることにつながったことや、カードの問題では自分の解決について考えるというように、「生徒自身が自分事として考える」ことへの評価を得た。また、教師が Paul になってアドバイスを聞く手立てや、スライドや掲示物を用いて生徒にわかりやすく提示する工夫など、手立てや準備についても高い評価を得た。

(4) 授業者の実践のふりかえり

授業者は、本時のねらい「相互理解」について、ともに「達成された」と感じていた。授業者にとって手応えのある授業となった。

指導方法について授業者は、「TT」のよさが発揮され、「役割分担がスムーズにできた」ことを挙げている。さらに Paul へのアドバイスの場面で実施した「役割演技」についても「(アドバイスの）必要感をもたらした」「興味を持ってもらった」ほか、「フィリピンの子どもたちには向いている指導方法である」と振り返った。関連して、篠原は「日本の道徳の指導方法がフィリピンでも通用する」と感じ、樋口は「指示を明確に（短く・わかりやすく）出すこと。これは、

日本でも同じこと」であると述べている。このように、日本の指導方法はフィリピンでも十分に活用できることがわかる。

多文化共生の視点では、篠原は「外国の子どもだけでなく、全ての子どもたちにいろいろな事情や家庭環境、個性があることを認識したうえで、大切に育てていきたい」と述べ、多様な背景をもつ人たちを尊重しようとする意識が高まった。樋口は、外国人児童生徒の受入に目を向け、「学校の国際化に対応できるように、校内支援体制を変えたい」と述べ、そのために「まずは自分がモデルとなり、積極的に外国にルーツをもつ子どもへ関わっていきたい」「相手の文化を知ることが多文化共生への第一歩」と振り返った。現地で授業をしたことでこれらの思いが強くなったと考える。

Ⅳ　総合考察

１．韓国道徳をもとにした教材・指導方法の有効性について

授業の様子（Ⅱ2.(1)）、ねらいの達成状況（Ⅱ2.(2)(4)）、児童のワークシート（Ⅱ2.(2)①②）や授業のふりかえりの分析（Ⅱ2.(2)③）、学んだこと（Ⅱ2.(2)④）、現地教員の評価（Ⅱ2.(3)）や授業者の実践のふりかえり（Ⅱ2.(4)）等を総合的に検討すると、韓国道徳の指導法をもとにした「Paul の悩み」は、多文化共生社会実現に向けた教材、指導方法の一つとして、有効であったと考える。

教材設定等については実施国の実態や宗教等をふまえて検討する必要があるが、「学習段階①問題の解決の仕方を学ぶ」、「学習段階②心情を考えて問題解決する」、「学習段階③自分ならどうするか実践的に考える」ステップは、有効であると評価したい。家族を優先に考えていた生徒が、学習段階①で学んだモデルや、T1 からの問い返しを通して、考えを広げたことがわかった。さらに「カードをめくり、自分ならどうするか」を考える実践的な活動は、意識の変容にもつながっている。最終的に「学んだこと」が「相互理解」や「問題解決」について集中したことからもわかる。

２．日本の道徳指導法について

授業者である篠原と樋口は異口同音に「日本の道徳指導法はフィリピンでも活用できる」と振り返っている。日本での指導の基本である発問や問い返しが海外の指導でも重要であることを実感している。さらに、「役割演技」の活用が自分事として考えさせたり発表への意欲を高めたりすることにつながり、フィリピンの子どもたちに有効な指導方法であることがわかった。

３．多文化共生社会実現に向けて（現地教員との協働実践の意義）

第 1 日目に「Paul の悩み」を実践したあと、現地教員との協議会を行っている。さまざまな点から協議ができたことは、授業づくりの視点だけでなく、教員の相互理解や現地の教育の理解が促進されたと考える。それらが、協働実践へとつながっていくことでさらによりよい授業になっていくのではないだろうか。2021 年に日本で韓国の道徳を改作して授業実践した際には、韓国の小学校教員との協働によるものであった。実践の結果よりもそのプロセスに協働的な学びがある。今後も協働で授業を検討したり、実践したりすることは日本とフィリピンの両国の道徳授業のみならず、海外における道徳授業の発展に寄与するものになると考える。

４．授業者（現職教員）の意識の変容

今回の授業実践を通して、①フィリピンの子どもたちや住んでいる人たちの理解の促進②多文化共生社会実現に向けた教員として意識の高まりがあったことが授業者のコメントからもわかる。このような意識の変容は、先行研究での実践（2018、2019）でも同様の傾向がみられ、日本での教員として、外国人児童生徒への指導観や多文化共生社会実現向けた指導に影響を与えていると考える。

Ⅴ　成果と課題

１．成果

(1)　「Paul の悩み」の授業実践は有効であった。

前述の通り、韓国道徳をもとにした教材と指導方法による授業は道徳的なねらいを達成することができた。「学習段階①問題の解決の仕方を学ぶ」、「学習段階②心情を考えて問題解決する」、「学習段階③自分ならどうするか実践的に考える」三段階の学習ステップも効果的であることが明らかになった。

(2) フィリピンの教員と授業を協議する場がもてた。

2 度の協議会での意見交換より、授業改善のみならず、教員の相互理解が促進されたと考える。文化が異なる国の教員同士で授業づくりや実践について検討する機会は極めて貴重であり、双方にとって大きな意味をもつ。

(3) 授業者の多文化共生社会実現に向けて教員としての意識が高まった。

授業実践を通して、フィリピンの子どもたちの理解が促進され、フィリピンの学校や教員の寛容さにも感銘を受けている。「教師が変われば子どもも変わる」。未来の多文化共生社会を創るためには、教員の意識変革が必要不可欠である。そのための貴重な体験になったと考える。

２．課題

(1) 新たな教材開発と実践の必要性

多文化共生社会実現に向けた道徳教材はまだまだ不足している。今後も新たな教材の開発と実践が必要である。特に韓国道徳の指導法をもとにした三段階の学習ステップやカードをもとにして自分事として実践的に考える指導方法は今後も日本国内でも活用できる。新たな教材開発と実践を積み重ねることが課題である。

(2) 協働実践継続の必要性

今回の実践は実質的な協働実践研究の第一歩である。役割演技を活用した新たな授業実践など、協働実践を継続することが課題である。

参考文献

上薗恒太郎・眞榮城善之介・岡崎耕（2014）「日本と台湾の共通道徳授業の意義と学習案」『教育実践総合センター紀要』13 巻 61-69 頁

釜田聡・堀之内優樹・周勝男（2020）「『異己』理解共生を目ざした国際理解教育のプログラム開発」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第 7 巻 81-94 頁

佐藤郡衛（2019）『多文化社会に生きる子どもの教育　外国人の子ども、海外で学ぶ子どもの現状と課題』100 頁、105-110 頁　明石書店

関根明伸（2018）『韓国道徳科教育の研究：教科原理とカリキュラム』東北大学出版会

関根明伸（2021）「第18 章　韓国」『新道徳教育全集第2 巻　諸外国の道徳教育の動向と展望』学文社

大韓民国教育省（2021）小学校道徳教科書『道徳科』

土田雄一（1998）「国際性を育てる道徳の授業」明治図書

土田雄一（2018）「海外における道徳授業実践研究　―フィリピンでの「四本の木」の実践を通して」日本道徳教育学会　第 92 回大会発表資料

土田雄一（2019）「海外における道徳授業実践研究Ⅱ―フィリピンでの「四本の木」の実践を通して―」日本道徳教育学会　第 93 回大会発表資料

長濱博文（2014）『フィリピンの価値教育　グローバル社会に対応する全人・統合アプローチ』九州大学出版会

松尾知明（2017）『多文化教育の国際比較　世界 10 カ国の教育政策と移民政策』183、207 頁　明石書店

松田憲子・土田雄一，「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅠ―教科書教材の分析」『千葉大学教育実践研究』第 24 号 23-34 頁，2021

松田憲子・土田雄一，「多文化共生社会実現に向けた道徳授業の構築を目指してⅡ―韓国道徳教科書を基にした教材開発と実践―」『千葉大学教育実践研究』第 25 号 81-93 頁，2022

松田憲子,「多文化共生社会実現に向けた道徳授業海外協働実践研究」科学研究費助成事業研究成果報告書 2023

文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別の教科道徳編

謝辞

本研究に際し、サンカルロス大学、サンカルロス大学附属初等中等学校の先生方、そして子どもたちのご協力を得たことに感謝の意を表します。

本研究は JSPS 科研費 JP20K22219 の助成を受け、実施したものである。